梵鐘を鑄る

藤原與一

私は自分の故里である、瀬戸内海の一島……愛媛縣越智郡所屬の大三島の北端の一寒村、鏡村大字肥海におこつた寧ろ奇聞的だとも思はれる、懷かしいこの事實譚を報告し樣とする。そして私自身は、この一篇の內容に多分の愛著をおぼえることはもとよりであるが、かうした記事を報告することそのことにも、何か意味がありさうにさへ思はれるのである。それは、一行事なるものが餘りにも心にくきまでに村の生活を、その村に生息する人間の心持を表示してゐるからである。私は、以下の事實を全く天眞爛漫な愉快な民族生活の一斷面乃至焦點的發表と見たい、眞劍な話で。だから、かうした文化資料(恐らく誇張的な言辭ではあるまい)を人に知つて貰ふことは、餘程大切なことの樣な氣がしはじめ、且つ放つておいて埋沒さすのは惜しい樣にも思はれたのである。思ふに必ずしも單なる好事ではあるまい。實はこの一くさりの話に附け足して、前以て主張したいことは澤山あるのだが、何をどんなに云つてよいのか、餘りにも私の頭は混雜しすぎてゐる。又餘り云ひすぎるのも、辯解がましく聞える樣なことがあつては殘念であるから、今は兎に角、仔細に事實を綴つてゆく。

所と時と行事と　瀬戸の海の群がる島々の中でも伊豫に屬する大三島は、早くから歷史上の因緣につながれた島があつた。周回が約十五里、高縄半島の尖端が一度海に消えて、又あらはれた樣な所に位してゐて、瀬戸內での最狹部を扼してゐる。その島の北端にある鏡村の大字の肥海は、全く安藝の國の海べりに押せまつてをり、而もその間に湖面以上に穩やかな海を抱いてゐて、島の南側が海岸にせまり切つた山で、愛媛縣の今治方面との交通をむづかしくさせる來島(くるしま)海峽に面してゐるのと對照的な姿勢をなし、隨つて大三島の文化上の一切の交渉が、

藝州の方に向つてより多くなされる（或はなされた）ことを物語つてゐる。この島は史實の上から云つても全く古いらしく、宮浦の里には大日本總鎭守國幣大社大山積神社が、早くから御座あらせられてをる。扨てこの宮に纒はる傳說奇聞は云はずもがなであるが、その大山積命のお鎭りました遙かに後に、神功皇后の三韓征伐があつたと考へて、その御途次もお立寄りになつたのであらうし、更に下つて藤原純友の亂の頃、或は源氏に追はれた平家の西走の道すがら、さてはあの倭寇の船出、それらに係はり、或は係はりなく巢喰つた豪族或は海賊、かうしたものに關してそれは澤山の話が、落され種付けられてゐるにちがひない。それらを措いて、私は今この島の北端に位置する肥海の村におこつた、右の樣な話に比べれば、極く片端的でもあるかの樣な事實を述べようとするのである。恐らく淸新な意味を擔つてゐるだらうから。

時代は大して遠い昔のことではない。明治十三年の出來事であつた。それであるのに村の今の中老の連中でさへも、この行事の樣子に就て一向に何も語り繼いでゐない。丁度それだけ皆の生活意識が飛躍して、近代的になつてゐるわけだと思ふと、猶更一時代前の村を擧げて鐘を鑄た聖なる行事が、人間的なありがたい一つの大きなはたらきであつた樣に、考へられてならないのである。この村は島の村によく見る樣な、海邊の蔭に寄つた村とは異つて、濱からは十町も奥まつた所から人家がはじまる。その十町の間と云ふものは、兩方に山が逼つてゐて村がはじまると同時に土地は奥で擴がつてゐる。その擴がりの右の袋の隅を、更に奥へ入ると、恰も眞東に向つて入ることになり、これ又先の十町あまりの間よりも、一層高い山が、更に更に狹まつてゐて、東に入つて右側がオンヂ、左側がサーシと呼ばれてゐる。

この土地では日當りのよいサーシも、濕地のオンヂも、共に山の下十分の三の所まで昔から開墾されてゐるが、村の檀那寺（曹洞宗）海藏山金剛寺の釣鐘は、全くこのオンヂの適當な斜面の所でつくられたのだ——村の右奥を外づれること約一町の所で。

この一箇の鑄造行事は鼓腹擊壤をこれ事とした、平和

郷に起つた劃期的な二大行事の一つであつて、第一の事件、明治十年の西南の役……村人はこれを西郷騒動と云ふが、これに武器おつとつて出征した村人のいくさばなしの、まだほとぼりのある頃に起つたものである。そして、古老はこの行事を決行するに至つた原因について、次の二つをあげてゐる。

二つの潮時　その一つは、西郷騒動による金錢の入りであつた。村人は西郷戰爭は日本はじまつての人氣だと云つて、大騒ぎしたさうである（して見れば、この事件はよほど各地の隅々までも発動させたものと見える）。そして日本に金錢が散らばつた時だと、思つてゐたらしい。日本的に散らばつたか散らばらぬかは兎に角、村に景氣よく金が入つたことは事實だつた。『鐘を鑄るなら今だ』。實際この鑄造作業一切には多額の經費を要する。思つてはゐながら仲々手のつかなかつたのもそのためだ。では敢て自分の村でつくらなくとも、その筋に誂へるなり買ひ込むなりすればよかつたのに。そこがワン・ジェナレイシャン前のことだ。人間の心の動き方がまるで違ふ。（そこが今の我々に愛著を起しめる所以であり、尊い民族文化の資料だと思はしめる所である）――我々は我々の手によつて、聖なる擧式のもとに村人の生命を鑄込めた梵鐘をつくらなくては、と云ふのが當時まであり來つた村人の心根の總計であつたらしい。今學問的に考へて見ても慥に意義深いことだ。

鐘を鑄るに至つた今一つの、しかも先のよりも大切な潮時をなしたものは、肥海村にあつた自治的な土地制の廢止に伴ふ豐かな收入であつた。と云ふのは、我々の島では（松山藩下）どの村にしても、藩治の頃にはならし一代と云ふことが行はれてゐたものである（その一代の年數は區々であたらしいが）。結局上司に對しては、その村に割當てられた年貢だけ上納すれば足りたわけであるから、土地を如何に人に按配するかと云ふ樣なことについては、各村毎に自治的に取計らふことが認められてゐたものと思はれる。それで私の村のならし一代の制度は、次の如くきめられてゐたのである。

――先づ肥海の村の全土地の内、山と畑とはそれを併せて二十四株にわけられた（田地は今の話には大した關係もないから略しておく）。次に各株毎に四つに割られ、その一つを四つ組と云ひ。その四つ組に十六の細分が行はれて、この一細分が一人の持前となつたのである（但し貧富の差により、細分されたものを幾つもつかゝきまつたことは勿論である）。而もその所有の權限ある期間を四十年間とし、それだけの年數を經ればその土地は一旦村へ返納されることになる。此處で又その土地は細分毎に村民に配り直される。この時此の前に比較的歩の惡かつた人が、今度は歩のよい所をもつと云つた工合に、可及的公平に土地の分配が行はれる。その按配方を村民の納得のゆく樣にやつてのけるのが、代官と庄屋と組頭（今の、村惣代）と株親（二十四人あるわけ）とその他の有志であつた。これらのものが、合議によつて實地檢證をしながら決定して行つたのには、ちつともそつがなかつたとは古老の述懐である。それもその筈であらう、今も昔語りになつてゐる先の時代の二人の物識りの如きは、所謂有志連中の錚々たるものであつて、圍爐裏に胡座をかいたまゝ、どこのどの山の境界は斯々〳〵で、山林の狀態は斯々であると、村の土地全體を暗識してゐたさうであるから。（田畑の品位隨つて作物の出來工合についても同樣だつた。）

扨て四十年を經て、代變りとなつて田畑がとりかへられる。それには大した未練もなかつたであらうが、思ひ切りの惡かつたのは山地である。それもその筈であらう。自分で折角仕立てた立木は、次第に生長しつゝあるのだから。すべてムカシノヒトハ、マツダイガマシイ（昔の人は考へ方が繼續的で、常に末代のことを思ふと云ふ風であつた）かつたのであるが、そんな昔の人は右に述べた樣な、山林の育ちかゝつた立木をあつさり坊主刈にして、剝げた土地を次の人に渡すと云ふ短氣損氣な制度には逢着しないで濟んだ。つまりならしが行はれても一畝當り十本の種木……松の樹に限る……をとつておいてその土地を次の人に讓り渡し、畝當り十本の松の木の所有だけは依然としてもとの人によつて繼續されたのであ

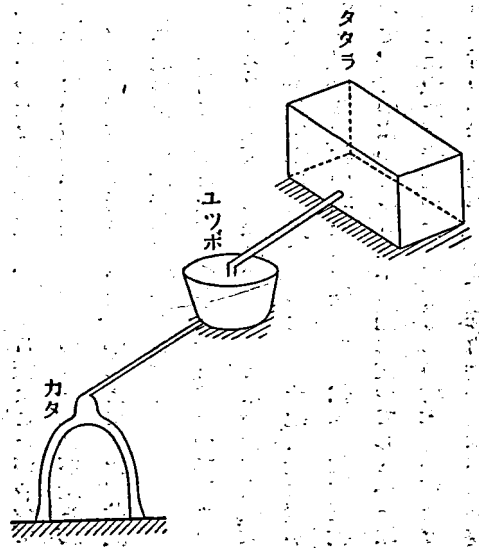
る。かくしてそれら殘された松の木には、幹の根に近い部分に切り目一つが施され（これをキリコ又はキツカと云つた）一代木と稱せられる。かうなると自分の山でない山に、自分の木がたつてゐると云ふわけであるが、又々次の代變りがくると、先の話の一代木のある山は更に第三人目に廻ることになり、その土地には一畝歩について云へば、今度二代木になつた第一人目の松十本と……これには新らしいキリコが今一つつけられて、二つのキリコで二代木なることを示す……新らしく一代木となつた第二人目の松十本と都合二十本の他人の木があるわけである。かうなると第三人目の人はその山地をあまり利用するわけにはいかなくなり、ほんに下刈りをし得る程度にすぎなくなる。こんなことが代變り毎に昂じると、代木の持主が木を伐らぬ限り、遂には人が山地を新らしくうけついでも恩澤を被り得る地面はちつともないことになる。それではいけぬと云ふので、キリコ三つまで即ち三代木までの存續が限度的にゆるされたのである。それが村の規約だつた。かうして三代木よりも古いものは先づなかつた。所が假令三代にした所で、山林が複雜になつて行つたことは容易に想像し得る通りであつて、家によると息子がまだ充分家督の案内をうけぬ内に、親爺が他界すると、自分の代木（ダイキ）を方々で探し出すのに困つた。それでも當時の人は正直だつたから（實際倫理化された社會だつたのである。でなくてはこんな制度もうまくゆかなかつたゞらう）家が斷絶する樣なことがあつても、萬兵衞山乃至萬兵衞松等の稱呼のもとによび殘されてきて、誰の所有にも屬さない山林がふえてきた。此處らで舞ひ起つたのが維新の風雲である。

御一新になると土地制は今までとは變つてアランカギリノスワリ（有らん限りの据り）となつた。素破大變、代變りがない樣になれば滅多に人の土地に物は置かれぬわけ、そこで村の相談は一決して一代木二代木三代木すべて、どの山のものも五年の間に伐つてしまへと云ふことになつた。皆伐つた。すばらしい材木のおびたゞしい山が村の海岸に築かれ、或は仰山な薪割木が積み重ねられて、次にこれらが姿を消した頃には、肥海の村には唸

る様に(土地相應に)金錢が入つた。代木の收入で肥海の村は金錢で唸つた。正に好況時代。「鐘を鑄るなら今だ」。

以上二つの潮時、と云つても要は金錢が入つたと云ふ一事かも知れぬ。けれども入り方がちがふ。やつぱり二つの潮時だ。彼等は隱忍自重して、かくまで金の入る時をまちうけ、そして雄々しく彼等自身で彼等自身の鐘を鑄たのであつた。——そうすることが一番勿體ないことであつたのである。當時の村の生活では。

鐘を鑄るため　資金はできた。愈々梵鐘を鑄造してこれを檀那寺に寄進し奉らうものと、時は明治十三年の夏(舊暦)先づ備後は尾道奥のウヅト村へ使が飛ばされて、こゝから鑄造の職人(イモジヤ)を迎へることになる。職人は都合三四人(正確に員數を知つたものがない)、鑄造に要する道具一切は先方が持參してきて、扨て前述の「村の右奥の端を外れること約一丁の所のオンヂ側の適當な斜面」に適當な場所が卜せられて、こゝで營々の準備工事がはじまる。その出來上つた設備の概略を圖に示せば次の如くである(古老の談話を筆者が圖化したもの)。



第一圖　鑄造一般

先づタタラ、次にユツボ、次にカタと云つた順序に高い所から次第に低所へと配置せられ、この三者が管によつて連結されることになるが、この全體的な勾配は丁度水が流れるほどの勾配である。隨つてオンヂ側の適當な斜面が選ばれたわけなのだ。

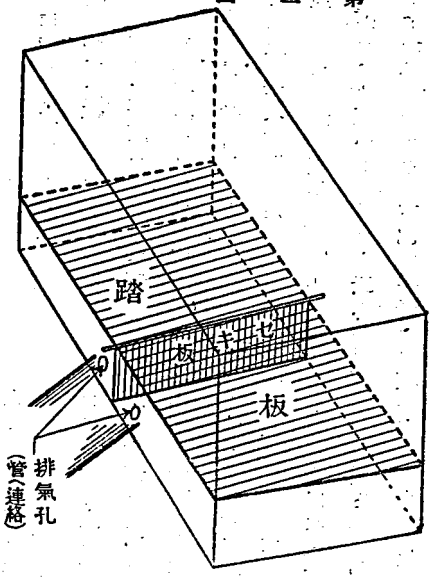
タタラのことは委しく後述するとして第一にユツボで

あるが、これは全く材料を沸かす釜である。厚みのとてもどついもので大きさは俗稱三尺ドーガエシ即ち直徑、深さ共に三尺と云ふ代物。この釜へはタタラから送氣管と云つた割合のくだが上から曲り込んでをり、この釜の下口からは鎔けたカネを流す恐ろしい管がでてカタの上部へ匐つてゐる。第二の、カタは、勿論二重で、今のアルミニユーム製以前のトースケ（銑鐵）製の鍋をつくる場合と同じことださうだ。この型の材料も矢張先方から持參してきたもので、素材は泥。これをねつて望みのカタにつくり上げると云ふ寸法。つまり彼等は方々の鐘を請合つては鑄造して歩き、そこ〳〵でカタをねり上げたものだ。二重のカタで、內側の分こそ何の造作もないとしても外側のカタは仲々厄介である。各種模樣的な凹凸はもとより銘も入れねばならぬし、就中面倒な吊手も一度に上の方へ鑄繼がねばならぬ。又折角カタになつても愈々カネの湯を流しこむ時に萬一のことがあつては（外側のカタは薄いもの故）と云ふので胴じめが施されるかくて內外の兩カタの下部は平滑な鐵板の上にきちんと水平におかれる。そしてユツポからきた管は外側のカタの吊手の部分の最上部に開いた穴に連なる。

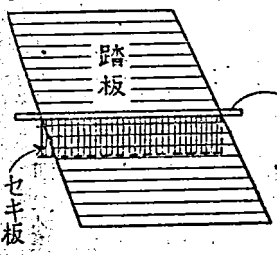
所で難物は一番高い所にある夕タラだ。これは鑄造工の適當な指示をうけて、肥海の大工がつくつたのであるが、まあ全體的な感じから云へば蓋のない、直方體の木製の箱と云ふ所であり、その效用は全くのふいごだ。つまり夕タラと云ふのは猛烈な風を急速に湯壺へ送り込みカネの鎔解を容易ならしめんがために特別に考案されたふいごにすぎぬ。長さが約二間で幅が約一間。深さ幾許。その箱へきし〳〵にすつぽり入る蓋を想像したらよい……そのふたの眞中筋へ（縱長と垂直に）鐵の心棒を固著する。その鐵の心棒に直接して下側に七八寸位の高さの板製のセキを附着させる。するとおちこんだ箱の蓋は七八寸のセキの板の高さだけ底面からはなれる。その位置の所で鐵の心棒が箱の兩側へさゝつて丁度シーソーの心棒の樣な役をする。こゝまでを圖示すれば左の如くである。

そうすると箱の深さは、踏板の一方をふみつくした時に、他方がはね上つて箱より外へ出ると云ふ樣なことの

第二圖



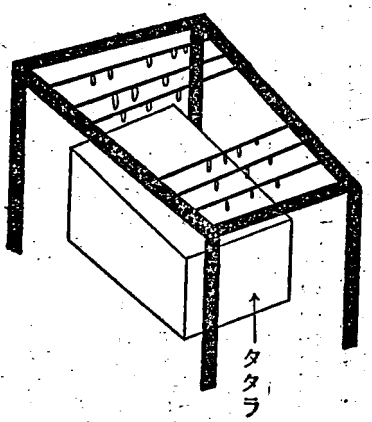
ない程度に深められなくてはならぬ。だから結局この直方體樣の箱の中にはセキ板を堺として二つの空洞がつくられるわけであつて、あたかもシーソーの如くに踏板の兩側を交互に上下せしめることによつて、兩空洞互に强烈な空氣を生じ、これを排氣孔を通してユツポへおくることができるのである。而もこの踏板を交互に上下せしめるのはタタラフミと稱して、實は人の足の力によつて、動かさんとするものである。隨つてこのために左圖の如き補助設備が要るのである。つまり踏む人は、桝形の木組みの横桁につけられてある下げ繩につかまつて、兩端互に飛上つてはふみつけ〳〵する樣になつてゐるのである。



第三圖　踏板同上

——これであらかたの設備は終つた。あとは鑄造式當日の式場を構へればよいのだ。

材料は？　既に職人が村の委囑をうけて、儲か今治又は尾道から主材料である鋼材をたんと買つてきてゐる。



第四圖

梵鐘を鑄る　陰暦八月――畑は作附けのないお休み時だ（昔はかうした大行事もちやんと農季に適合させてゆける餘裕がある、のんびりしたうるはしい生活であつた）その月のある日、今日こそ我らの鐘の鑄上げられる大事な式日。とてもよく晴れた早朝、鑄造場の周圍には早や人垣が十重二十重。式場を中心にして約三町ほどの左右に、長い地區に人は黒山なす騷ぎ、式場より山手も下手も。これらの人の中には大三島の他村はもとより、瀬戸内の他の島々、はては藝州の諸方から夜明をかけて、やつてきた見物人が決して少くなかつたとのこと。何樣かゝる行事は滅多に拜むことのできぬものであつたので、我も〳〵この聖なる式場に馳せつけたのである。そしてこの聖なる式をあげて、他の行事では決して見られぬかゝる大群集をよせつけることが、全く村としての最大の誇でもあつたのだ。

扨て、鑄造場の棧敷上段の中央には、時の金剛寺住職大道十三世が端坐してをり、その他、村の組頭以下の役目役目の人はちやんと席について、今日こそ鑄造師頃日の苦心の報はれる日、先づユツポに材料が入れられはじめる。大部分は銅材、それに木炭等がほうり込まれていさと云ふので點火される。愈々タタラフミがはじまる。

タタラをふむと云ふのは、つまりはタタラの踏板を踏むと云ふことであるが、それには仲々の技巧が要つたものか、この式日の一月も前から寺の庭で、夜々にタタラフミの稽古が行はれた（一つはタタラフミの音頭の稽古もあつたゞらう）。扨てこのふみ方と云ふのは、頭上の横桁の垂緒につかまつて、相手先の一組とこちらの一組とが互に他と反對に、反動を利用して、垂緒に縋りつゝ飛上り飛降りするのである。そしてこの踏み手には、當時の青年は全部參加したものである。一度にタタラの上にあがる人數は、心棒の兩側に兩者互に內向に向ひ合つて先方に十人、こちらに十人と云ふほど。その當日の扮裝はと云へば、背丈三尺內外のカンレイシャの襦袢で、その背中には紙製で金剛寺を象徵する㊀の紋が入れられ、頭には揃ひのキーロバチマキ（黃色の鉢卷）が横ぬぢに

くゝられた。――『火が入つたぞ』『やれ、ふむのだぞ』パタ、パタ、パタ、パタ。最初の内はゆつくり〳〵と、而も威勢よく悠々とふまれてゆく。その度毎に排氣孔からはスー〳〵〳〵とかすかな音をたてゝ、風が匂配の管をユツポへと下つてゆく。カネの湯ができるのだ。見るとユツポの中は次第にぐちや〳〵と混雜しはじめてゐる。觀衆の興味は今更云ふまでもない。こゝらで綺麗な咽喉の音頭取のタタラフミの歌がひゞき出す。

タータラ　フーメーフーメーヨ――　ナーカーフーメータータラヨ――。

ナーカヲフーマーネーバーヨ――　ヤーレー　カーニヤーワーカーノ――ヨ――。（タタラ踏め〳〵ヨー中踏めタタラヨー。中を踏まねばヨー　ヤレ鑪（カニヤ）は沸かぬヨー。）

かくて中へよつてふむほど、タタラはパタ〳〵とより敏速にシーソー的運動をはじめ、風は彌が上にも猛烈に送られることになる。丁度ふみ手の草臥れはじめた頃、『おい、行くぞ』とばかりに交替が飛上る。續いてぴよんぴよんとび上る早業、流石は一月も練習じたお蔭とは云へ修練の物凄さ。かくて交替班が全部上り了へて新手が一しきり高い歌聲でふめ〳〵とばかりにふみしきる。中でも音頭取りは盆踊でも見るごとく交替なしの重職、此に加へて巧みなふみ手も常連と云ふわけで上つたきりにすべて力を用ひることなしに常時巧者にふんでゆく。實際ふむことの下手な人はおもしにこそなれ爲にはちつともならなかつた筈だ。そして、今云ふ交替班と云ふのは三四交替の用意ができてゐたらしい。

この休養中の交替班の面々は、正に當日の主潮をなす若きヒアロウ達であつた。と云ふのは次の如きことによつて彼等が眞正面から、聖なるべき儀式の意義を發揮したから。即ち、休養中の一同は當日の許多の群集の中を縫つて、許多の人のクリキを求めたのである。そのために前以て直徑六寸ほどのミソコシ（竹で編んだ飯を盛る籠）の、四五尺の長柄をつけられたものが用意されてゐた。これを差揚げて皆人の寄捨を促して廻つたのである。然らば何故かうすることが、聖なるべき儀式の意義を發

揮せしめることになつたか。それには次の如き信仰が行はれてゐた。――我も我もと喜んで寄進したゼニを鑄込めてつくつた鐘ほどよい音色を出す。世話をする人々のクリキ（勤勞奉仕）と、あまたの人の寄附によつてのみ眞の名鐘が得れる。但し鐘は非常にケットーヲイム（血統を誇む……その人の性質を問題にすると云ふ意）から高慢な言を弄し不敬の所爲あるものが、假令天保錢一文出してもその金は鎔けぬ、と。結局優れた梵鐘を鑄るためには、人の快き寄進をうけることが、是非必要だつたのである。故に單に鐘を鑄ることそのことが一大神聖行事であつたのが、このあまたの人の善心に訴へると云ふことで、更に儀式の（當然もたらされてしかるべき）神聖味を發揮させることになつたのである。だから事の前に大三島内は勿論、既に隣りの島々である伯方島、大島、生名島、岩城島（以上すべて豫州）、果ては向ひの藝州の島嶼、地方（ヂカタ……本土部）の方までも寄附をつのつて廻つたものである。（當日の觀衆が遠方からも拜觀にきたのは實にこのことによる）。そこで當日とても、見物の人々はかねて用意の穴開き錢を出すわ〳〵。中には持ち合せのない女達、巳のクシ、コーガイなどをミソコシに投込む盛況だつた。この當日の喜捨でも大變なものだつたらしい。それもその筈で時の群集は號して何千何萬と語られてゐる。人氣は正に西南戰爭の時と同じであつた。ある店屋の如きは五丁の酒を賣上げたと云ふ。かくまで大がゝりないみじき限りの行事だつたのである。（すべて女などは月經のあるものと云ふ廉で、近くの方へはなるべくよつて貰ひ度くなかつた、と云ふのもその一證左にふさわしいものである）。

その群集が一番見度く思ひ且つ狂喜するのは、愈々カネの湯をカタに流しこむ時の實況であつた。湯の沸くにつれて、タタラは次第に早目にふみしめられてゐる。一體カネが沸くときはブーと沸いてこなくては駄目で、粘つたら始末が惡い。それだから沸き出すとしきりに踏まなくてはならない。かうなると、交替も仲々容易でないが、そこが稽古の功德、『おい代るぞ』『よし』と云ふので、上の者はタタラの自分の側が下降した時にとび降り

る。直様タタラの上昇に呼吸を合せてとびのり、次に下降する際は早や一人前にふみつけてゐると云ふ工合で、全く目にもとまらぬ位の所である。かくてふみにふまれ風を吹きこめるだけ猛烈に吸きこんで、遂にカネは全く鎔けてどろ〳〵の湯の樣になる。これからユツボの下口をぬくまで暫時の間をおいてやすませる。こゝで職人の棟梁（イモジヤ）は南無首尾よくと瞑目して念じたことであらう。『ぬくぞ！』……素破と云ふので群集は一段と間近に押寄せる。だが職人の手元は仲々愼重だ。まかりまちがへば人も型も大怪我をする。やがて職人の顏に固い確信の波が動いたかと見ると、次の瞬間には！　火の川だ！灼熱の流だ！　流れるカネの湯は次々とカタの內部へ呑まれてゆく。……カネはカタに入れるだけ入りこんだ。カタは微動だにもしない。出來た!!　職人はやをら背を伸して、心もち昂奮しながら程よく出來た旨を宣言する。萬歲！　萬歲！　役ある人々も全親衆も、總立になつて一大歡呼が絕叫されたのである。（その當時、やはり萬歲と云つてゐましたかと古老に尋ねたらはつきりしないがまあウヮーィ〳〵と云ふ所だつたらうとのことである。）

——その鐘は、型の中で熱をさますために二三日の間そのまゝに置かれた。

鐘が出來た　三日ほどたつと、鐘は全く冷え切つた。時分は、よしとイモジヤは、さしものカタをとり去つてカネの湯の流入口の所（卽ち吊手の最上端）を鑢ですり切る。何と申分のない出來！　見よ、鐘の面には「海藏山金剛禪寺」それと對蹠の位置に『現住十三世大道代』と立派に銘が浮き出てゐるではないか。ユツボのある下地は一面に、カナハダの樣になつてゐて、土地はちんちんと堅い。實にこの釜では必要量以上、ゆつくりあるほどの分量が猛烈に鎔かされて行つたのだ。

鐘は全く完成した。いざ奉納と云ふ段になると、村をあげて大振鉾の御馳走がつくられた。村中が皆なお客さんである。その一日は臨時に車輿（ダンジリ）がつくられ、村中の通れるだけの道は皆ひきまはした。云はずも

がな、そのダンジリには、作り物の辨慶が件の寶物の大鐘を背負つた形がじつらへられてゐたのである。

大詰は愈々お寺へ奉納、次いで撞き初めと云ふことになる。村のこの鐘は誰か一番澤山の喜捨を捧げた人がツキゾメをしたとか。(因みに我々の方ではある橋の通り初めの際に、一番澤山寄附した人が通り初めをしたと云ふ例が近來にある)。かくて純朴な愉快な村の全生活の表現としての、或は島の文化の代表としての梵鐘鑄造の大行事は大團圓を告げたのである。

餘聞　私はこの肥海の村の梵鐘鑄造を、極く幼少の頃に見物した他の島の人の口から、圖らずも一奇譚を聞かされたと云ふのは梵鐘をつくる際にはすべて一枚の湯卷を鑄込まなければ本當の鐘にならぬ、が反面又湯卷をとりあげられた當の女はきつと死災に遇ふと云ふ。そこで誰しも湯卷はとられたくないから皆これを隱しておく。と云つて鐘のためにはそれが必要不可缺である。隨つて否でも湯卷一枚盜み上げなくてはならない——そこで盜みに廻る。『湯卷は人前に干すべきものでないと云ふのはそこだ』とその人は言つた。現に鐘を鑄る職人の棟梁のことをイモジヤと云ふてをるではないか——と云ふのだ。

所が、肥海のある老人の話によれば、成程イモジを一枚入れると云ふことがある。そしてそれを入れると、その女は何とかだとの話はある。がイモジヤはイモノヤで云はゞ今のイカケヤ(鍋、釜の修繕等を業とするもの)である。(なるほど、さう云つて見ると銑鐵の鍋などを作るのはカタを使つてゐて鐘を鑄るのと同調子だ)現に土地の人はイカケヤのことをイモノヤとも云ふではないか。勿論肥海の鐘はイモシなど入れなかつたゞらう。月經をもつことのあるべき女の近寄ることすら諱んだのだから——とのことである。

兎に角このイモジヤの一件も、傳說的な興味は多分にもつてゐるが、もとより穿鑿すべきほどのことでもあるまい。今はたゞ古老の話を忠實に書きとめたゞけのことである。